

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

ゼミは6月も開催します

2年3カ月振りに、水道橋の新会場(全水道会館)で再開した5月7日ゼミは、会員の皆様のご協力が無事終了しました。6月も同様の感染対策を講じて実施します。就いては下記の通りご案内しますので、諸対策に協力の上、ご参加下さい。

<感染対策>

- 1、会館入口に消毒液と**検温器**が設置してあります。
○各自で検温器で体温を測定して下さい。**37.5℃以上の方は入室禁止**となります。
- 2、**不織布マスク着用**
○プラスチック製フェースシールドやマウスガード着用は予防効果無しですので、入室をお断りします。
- 3、最新の**コロナワクチン接種完了者**は入場可能です。
ゼミ会費納金時に、**3回目又は4回目接種完了の旨を口頭で提示**願います。
- 4、会議室は強力換気扇と窓開放で**換気**をします。
- 5、3人席の机に原則2人使用(真ん中1人分を空ける)
- 6、講演台にはプラスチック製の衝立を常備します。
衝立は、ゼミ講演者の飛沫拡散防止用です。
- 7、**川崎会**(ゼミ発表者を囲むゼミ後の懇親会)と**世話人会**は当分の間**休会**とします。
- 8、感染等に付ては自己責任で対処をお願いします。
- 9、尚、**当ニュース発行後に、感染が激増し「緊急事態制限」等による行動制限が発表された場合は、中止**となります。中止の場合は、HP上の緊急告知やメール等でお知らせします。

<4回目ワクチン接種等について>

ワクチン接種で先行しているイスラエルの研究結果では4回目を接種した60才以上の33万人では、3回目のみの23万人と比べて、入院リスクが64%、死亡リスクが78%減っていた。即ち、ワクチンには重症化予防効果が期待できる(4月25日米ネイチャー・メディシン紙に発表)。

<ZOOM視聴について>

新型コロナの変異株が、まだまだ気になる会員から、ZOOMによる視聴の要望が寄せられました。

さて、当会は、会員有志の協力で運営していますが、本件に詳しい会員各位に協力願ひ、実現に向けて検討を開始します。条件としては、ZOOM参加者のインターネット環境が存在する事、又、費用としては、ZOOM運営費、ゼミ会費等が必要となります。一定のテストをクリアして、実現OKとなった場合は、改めて当ニュースでご案内いたします。

年会費について

年会費の件は、5月7日のゼミ会場で参加会員には口頭で告知いたしました。改めて、会員各位にご案内いたします。年会費については、ゼミ休止の2020年12月までに古代史ニュース299号と301号で、その考え方をご案内しましたが、その後、コロナの猛威が続き、休止期間は2年3カ月に及びました。一方、この期間に発生した費用は、古代史ニュース発行関連や、会議室キャンセル費等でありますが、当該費用は会の負担とします。就いては、今後の年会費について、下記の通りと致しますので、御了承下さい。

記

- 1、2020年と21年分の年会費は徴収しない。2022年分から適用し、5千円を徴収します。
- 2、既に2020年に年会費を納金済みの会員は、これを2022年分として振替えます。又、2021年分以降も納金済みの場合は、順次23年、24年分として振替えます。
- 3、従来の年会費は、会員の入会月毎に夫々納金して頂きましたが、今後は入会月に関わらず、一律当該年の1月納金を適用させていただきます。従って、2020年に年会費が未納の会員は、入会月に関係なく、本年の早期に2022年分として納金して下さい。
- 4、尚、2020年分の年会費が未納の会員宛には、当

方の担当より、メール又はハガキでご連絡しますので、当ニュース1頁冒頭記載の銀行口座宛に振込をお願いします。

6月4日ゼミとテーマ13:15～16:50

水道橋駅の全水道会館：5階の中会議室

4階の大会議室ではありませんので、ご注意！

律令とローマ法—古代法の東西比較—

—6月4日ゼミの予告：藤田 一郎会員記—

律令とローマ法は、ともに古代社会で導入された法律ですが、それが生まれた古代中国と古代ローマの政体の違いを反映して、両者の中身は全く異質なものとなっています。

刑法にあたる律の歴史は古く、戦国時代(BC5世紀～BC3世紀)の諸子百家の一つである法家思想がその根底にあります。法家思想は、信賞必罰による法治主義によって、強力な中央集権国家の樹立を説きました。その法家思想をもとにBC4世紀から国力の増強をはかり、BC221年に中国初の統一国家(中央集権国家)を実現したのが秦です。

一方、行政法や民法などに相当する令は、前漢の七代皇帝武帝(在位 BC141年～BC87年)による儒教の国教化以降、儒教倫理の受け皿としても用いられました。とりわけ、君臣・父子の身分秩序の維持を中心にして、統一王朝の思想統一には極めて都合のいい政治哲学(修身齐家治国平天下)を育むうえで大きく貢献しました。

儒教思想は、その後の中国社会においても最高の徳目とされたため、中国では古代から近代に至るまで、民衆の政治参加は完全に遮断され、民衆の側からも政治参加への要求が出されることはありませんでした。一君万民(王地王民、日本では公地公民)を理想形とする社会では、個人の政治的権利とか人権とかいった言葉は勿論のこと、そういった概念さえ芽生えることはありませんでした。したがって、律令は当然のことながら、支配者のための支配の手段として発展してきました。

それに対して、古代ローマは王政でスタートしたものの、王も市民集会での信任投票を受けるなど緩やかな権力構造となっていました。その王政も、BC509年には七代目王の失政を機に王が追放され、以降は権力の過度な集中を避けるため、王に代わって任期1年の2名の執政官が市民集会で選出され、政治・軍事の最高責任者となりました。

ローマ史では、BC509年からBC27年までの政体を

共和政とよんでいます。共和政期の特色は、一部の既得権所有者である貴族階級に対して、多数派の新興勢力である平民による政治的権力の平等化闘争が続いたことです。その結果、BC367年には2名の執政官のうち1名は平民から選出することとなり(リキニウス法の成立)、BC287年には平民会の決議を元老院の承認なしに国法とすることによって(ホルテンシウス法の成立)、貴族階級と平民の政治的権利については、ほぼ平等な社会が実現しました。こういった社会背景のもとで生まれたローマ法は、支配者のための法ではなく、市民の権利保護を主たる目的としています。

ゼミでは、律令とローマ法について、歴史的な成立過程から入って、具体的な法の内容についてまで、つぶさに眺めてみたいと考えています。以上。

「曾我兄弟の敵討ち」の裏側を推理する

—清野 敬三会員記—

◇はじめに◇

鎌倉時代の初め、富士山の西麓に広がる広大な草原を舞台に、源頼朝による大規模な「富士野の巻狩り」が行われた。その機に乗じて「曾我兄弟の敵討ち」が突発している。僕の故郷は、その富士の裾野に位置する。頼朝が馬を繫いだ「駒留の桜」や兄弟が謀議をしたと云う「音止の滝」などは、僕ら小学生の遠足の目的地だった。

兄弟の大胆な行動と壮絶な死は人々に衝撃を与え「曾我語り」として語り伝えられ、後に『曾我物語』の「真名本」や、より粉飾された「仮名本」が成立する。江戸期になると、歌舞伎・能・浄瑠璃等の作品に取り入れられ、さらに脚色が施され「曾我物」として人気を博す。戦前には親孝行の美談として国定教科書にも載り、国民の誰もが知る物語となった。

これを「歴史上の事件」として見てみると、単なる敵討ちではなく、どうも頼朝政権に対するクーデターらしきものが感じられる。鎌倉時代の根本史料とされる『吾妻鑑』に敵討ちの記事はあるが、それに関連した騒動の説明を欠いており実態が分かりにくい。これを解明するには、史料を超えた「推理」が必要になってくる。

◇敵討ちの概要◇

事件の発端は、伊豆の豪族内の所領をめぐる争いである。工藤祐経は、相続に絡み土地を横領されたとして同族の伊東祐親に恨みを懐き、安元2年(1176)郎党に命じ祐親を射殺しようとした。ところが矢がそれて、一緒にいた嫡子河津三郎祐泰を射殺してしまった。あとに

残された5歳の十郎祐成と3歳の五郎時致の二人の子供は、母親が曾我祐信と再婚したため、曾我兄弟として養育され、祐経を父の敵とつけ狙うことになる。

時に、伊豆の流人源頼朝が兵を挙げ、平氏を滅ぼし源氏の世となる。兄弟の祖父祐親は平氏方につき、捕らえられ自害し伊東氏は没落する。一方、敵の祐経は頼朝に従い、その寵臣となり鎌倉幕府の有力御家人となる。

頼朝は征夷大將軍に補任すると、翌建久4年(1193)富士の裾野で盛大な巻狩りを挙行了。これは単なる狩猟ではなく、軍事訓練であり武威を誇示するデモンストラーションでもある。巻狩りの最後の夜、兄弟は祐経の屋形に押し入りこれを討取り、永年苦節の志を果たした。

◇討入り後の騒動◇

兄弟の敵討ちは、祐経の殺害だけでは終わらなかった。祐経殺害後、乱闘が起こり兄弟は警護の武士たち10人を殺傷した。所謂「十番切り」である。しかし、兄祐成は仁田忠常に討取られ、弟時致は頼朝の屋形を目指して奔った。頼朝の命にも危険が及び、自ら剣を取り立向かおうとさえした。時致は生け捕りにされ、尋問に対し「頼朝を討って後代に名を残したかった」と答えている。この時、屋形内では「頼朝が討取られた」との誤報が鎌倉まで届く程の混乱が生じている。

一方で、この巻狩りに参加していた常陸国の久慈の武士たちが、祐成らの夜討ちを恐れ無断逃亡する事件が発生している。また、常陸の有力御家人多気義幹が、八田知家との勢力争いから謀略の疑いで失脚する事件が起きている。史料からは詳細不明であるが、巻狩りと敵討ちと併行して、何らかの陰謀が行われていたものと考えられる。

◇範頼のクーデター嫌疑◇

大きな事件としては、頼朝の弟範頼の粛清がある。巻狩りの終了直後に、範頼は突然謀叛の嫌疑をかけられ伊豆国に配流され、その後死亡している。頼朝暗殺の誤報が鎌倉に着いた際、嘆く政子に範頼は「私がおります。義姉上ご安心を」との不用意な発言をし、頼朝の後釜に座るつもりと曲解された。範頼の一族が誅殺された際、祐成と同母兄弟の原小次郎も含まれており、範頼と曾我兄弟とのつながりも浮上する。ここから敵討ちの背後に、頼朝に代わり範頼を擁立しようとする陰謀があったと疑う余地もある。

さらに、相模の有力御家人である大庭景義と岡崎義実が、突如出家している。二人の出家は、範頼粛清と

同時期であり、それに関連したものであったと推測できる。また、源氏一門の安田義定・義資父子が頼朝により梟首されており、関連が疑われる。

◇北条時政黒幕説◇

兄弟の敵討ちは、北条時政が黒幕であるという説が古くからある。(三浦周行「曾我兄弟と北条時政」『日本史の研究新輯二』岩波書店)。

史料の上からは、時政の事件関与を直接跡付けることはできない。しかし、『吾妻鏡』に時政が烏帽子親となり、時致の元服をした記事があり、しかも敵討ちには無関係であると、わざわざ弁解に努めている。『吾妻鏡』は北条氏の立場に立って編纂された歴史書であることを考えると、逆に時政の関与が疑われる。

頼朝は、時政の功労にあまり報いていない。幕府の重要な役職は皆他の御家人に占められ、時政は朝廷の官職の推挙も受けていない。この処遇に不満を抱いたかも知れない。しかし、身内に厳しい頼朝の性癖から危険を感じており、沈黙を守り不満を押し隠さざるを得なかった。そこで曾我兄弟を幫助し使喚して、祐経だけでなく頼朝も討たせようとしたのではないか。なお、富士野の巻狩りの準備は時政の担当であり、援助しやすい立場であった。

一方、兄弟の祖父祐親は、頼朝の伊豆流人時代の監視役である。自分の娘が頼朝の子を成したと聞いてその子を殺した上、頼朝をも誅殺しようとしている。頼朝旗揚げの石橋山の戦いでも、また富士川の戦いでも敵対し、捕らえられ前勘を恥じて自害している。この点からみると、兄弟の父と祖父の二重の復讐だけでなく、時政の頼朝に対する報復を意味することとなり、三重の復讐となる。

◇反北条クーデター説◇

永井路子氏は、史料にはない事実を小説家の直観であぶり出し、歴史的推測として「反北条のクーデター」という、もう一種別の事件が起きたと推理することができるとしている。(「裾野で何が起こったか」『つわものの賦』文春文庫)。

北条時政黒幕説は、時政が兄弟を唆して頼朝を狙わせ、クーデターを起こそうとしたとするが、永井氏は逆とみる。時政は弟時致を臣下扱いしたため、兄弟は激しい不満を抱いていた。兄祐成が時政の親衛隊である仁田忠常に殺されたのは、祐成が時政の宿舎に突っ込んで行ったことを意味するとみる。

また、敵討ちの直後、常陸久慈の武士たちが無断で

裾野から引き揚げたのは、クーデターを起こしかけた勢力と何らかの気脈を通じての離脱とみることもできる。つまり、八田知家に失脚させられた多家義幹と、久慈の武士たちは繋がっていたのではないか。

さらに、有力御家人の大庭景義・岡崎義実の出家は裾野の一件が原因であり、むしろ裾野の事件の主謀者はこの二人とみる。この騒動は相模・伊豆の御家人の勢力争いであり、一方の極に時政がおり、他方の極に二人がいて反北条氏のクーデターとみる。このクーデターは時政・頼朝を討ち洩らして失敗したが、頼朝の裁定で全てを水に流し、曾我兄弟の敵討ちに過ぎないということで了解し妥協が成立し、真相は秘すことにはなからうかとしている。

坂井孝一氏は学者の立場から、真名本『曾我物語』と『吾妻鑑』とを比較して物語の構想や史料の原拠を導き出し、虚実を突き止める方法をと、敵討ち前後の不審な記事を相互に結び付けた。その結果「富士野の敵討ち」とは別に大規模な武力衝突があったとして、永井氏の説と近い一種親近性のある「仮説」を提案している。ただし、兄弟が時政に不満を抱きその命を狙ったとする点では永井説に異を唱え、時政は兄弟の背後にあって祐経殺害の黒幕として動いていたとみている。『曾我物語の史実と虚構』吉川弘文館

◇事件の考察◇

私は、兄弟の敵討ちは時政が背後で援助したからこそ成功したと考える。その意味では「時政黒幕説」に与する。この説の弱点は、事件後、時政が処罰を受けた形跡がないこととされるが(呉座勇一『頼朝と義時』講談社現代新書)、時政は表面に立たずあくまで黒幕に徹し、頼朝には舅として後見の立場を保持したものと考える。また、頼朝を討つことで展望が拓けるわけではなく、時政には動機が無いとするが、敵討ちは敵に対する憎しみだけが全てであり、自らの利害は無視する不合理なものである。

一方、敵討ち後の武力衝突が、時政と大庭・岡崎の二極対立によるクーデターという説も疑問がある。鎌倉初期は、御家人たちの対立と陰謀の歴史である。しかも「敵の敵は味方」ではなくて「敵の敵も敵」である。二極対立ではなく、多極対立である。兄弟が時政に庇護されたからこそ敵討ちが成功したとは云え、頼朝に恨みがあったことも事実であろう。相手方のクーデターに利用されていたかもしれない。

いずれにしても、歴史上の事件についての真相を知

ることは難事である。しかし明確な史料にない事柄は明言できないとして学者の良心に固執していれば、真実の探求はそこで止まってしまう。三浦氏の「時政黒幕説」も、永井氏の「史伝」も、坂井氏の「仮説」も「歴史上の推理」であり、ある意味では「想像」である。歴史の真相解明のためには、「推理と想像」を必ずしも排除すべきではないであろう。以上

—余談—

本文で参考にした三浦氏の「曾我兄弟と北条時政」は、大正4年に書かれた文章である。内容は新鮮であるが、文体は如何にも古めかしい。僅かの歳月の経過でこうも違うかと驚く。しかも「姑く」「遠に」「畜に」「疚しい」「弁える」「聊か」等々、昨今人気のテレビ番組「漢字読み方クイズ」に出したいような語彙が、当たり前のように使われているのも面白い。(しばらく・さすがに・ただに・やましい・わきまえる・いささか)

2022年今後のゼミ日程(敬称略)

7月2日: 邪馬台国研究史—昭和期—小川孝一郎

8月6日: ①伊勢神宮の創建—増田 修作

:②女王の国々と狗奴国について考える
—槌田 鉄男

9月3日: ①「スバアネティ」(グルジア人に含まれる先住民族)—二階堂 剛

:②後期青銅器文明の崩壊と「海の民」・後編—亘 康男

10月1日: 古代国家形成と東アジアの概観

—鈴木 靖民先生

11月5日: 方形周溝墓から前方後方(円)墳への変遷—その築造規格—守屋 尚

12月3日(予定): 江戸期の日本を見直すⅡ

—江戸期遺産の再評価・経済・社会編—齊藤 潔
○12月3日の講演日は予定です。予約確定次第、お知らせします。

<ゼミ会場>

1、全水道会館 **中会議室(5階)**

開場は12:35頃で、ゼミ開始は13:15分です。

2、全水道会館(8階建てビル)への**アクセス**

①**JR水道橋東口**(お茶の水駅寄り)下車、北方向へ神田川を渡り、徒歩2分。

②**都営三田線水道橋駅**下車A1出口より北方向へ徒歩1分。

○電話:03-3816-4196